

富士に祈る 59

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その13 —



八角供養塔(解脱会提供)

先回は、聖憲が東京市内の各地に集会所を広げていく中で、解脱会の教えを「祝詞」にまとめ、懸案だった天津教へ参加することによって活動の展開の自由を得て、「六番地」の時代が始まるまでを記した。今回は、聖

憲が醍醐派分教会の認可を得て、北本宿にその本拠地を置いて、大日如来を祀り、さらには「八角供養塔」の形を取り入れた天茶供養の形式を整えたり、萬部供養を行うなど布教活動を進めると同時に、教義をわかりやすく説いていったことまでを記す。

六番地での活動が始まり、北本宿での大祭も軌道に乗ってきたころ、聖憲が必要に迫られたのが、これまで自身が様々な形で説いてきた教えを一般の会員にもわかりやすくまとめることであった。

これは、日々の勤行を中心とした修行の基本型を文章化してゆく作業でもある。しかし、こうした作業で警戒しなければならぬのは、「信仰の形態化」の問題であった。

形式として「型」に固定化された信仰は、「型」が一人歩きをして、内実が失われていくことが懸念されるからである。「型」を守りながら、なお且つ現実に即した内実を守っていくためには、常に「変化」が求められるのだ。

こうした葛藤を伴う作業から生み出されたのが「信仰十則」であり、「祝詞及挨拶」であった。

「信仰十則」は聖憲が自らの体験を通して練り

上げてきた「神と人との関係」をもとに「人間の生き方」を説いたものである。また、「祝詞及挨拶」は「礼拝の時拍手を打つ理由」「天茶供養の理由」「修業に就ての心得」「毎朝夕礼拝の詞」「日々御先祖への御挨拶」「生霊一切の御託」など、日々の修行の心得を説いたものである。こうした事柄は信仰を實踐していく中で、基本となる心構えとその意義を説く「手引き」となったのだ。

昭和八年(一九三三)九月のこと、真言宗醍醐派の宗務庁から分教会の担任教師となることを許可するという書簡が届いた。聖憲は慎重に考えを巡らせた。解脱会の活動が地歩を固めつつある今、大日如来を祀り、寺院の分教会としての活動をこれに重ねることができかどうか。ようやくまとめ上げた「信仰十則」「祝詞及び挨拶」と共に生かすにはどうすべきか。聖憲は北本宿に分教会の本

拠を置くことで六番地の活動に大きな影響が出ないように配慮し、これを解決しようとした。

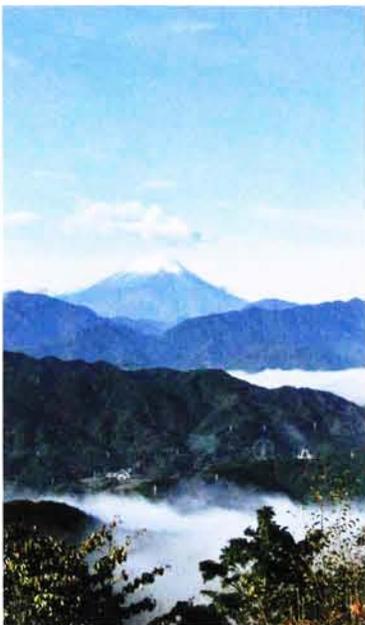
昭和九年(一九三四)一月に入り、分教会所の形を整えて大日如来を祀った聖憲は正式に醍醐派解脱分教会所担任教師に任命された。同時に次々と支部が生まれていく解脱会を統括するために、東京を五つのブロックに分け、相互に連絡と協力を取らせることにした。そして、支部ごとに月一回所属する全会員が集う日を決め、これを「感謝日」と呼ぶことにしたのである。

また、天茶供養を個人に直接関わりのある霊だけでなく、広く地域に関わる霊も含めた「供養」へと変えるために、「八角供養塔」の作成が図られたのもこの時期である。従来、天茶供養は各家庭が供養札を聖憲から授けられて行われていたが、これをより広範囲な霊を安霊するために八角塔に

したのである。上部に大日如来、東西南北に阿闍如来、宝生如来、阿彌陀如来、釈迦如来を配し、阿闍如来の向かって左側の面に「大祖元以来先祖代々一切之霊」、宝生如来の左側の面に「大祖元以来先祖代々無縁網姻萬霊」、阿彌陀如来の左側の面に「大祖元以来色生幼変無縁一切之霊」、釈迦如来の左側の面に「太古以来鳥獸虫魚樹木草一切之霊」が配されている。八角塔に墨書されている諸霊をみても、広範囲な「供養」ができるように考え出された塔であることがうかがえよう。よって、当初この八角塔は個人宅というよりは、支部ごとに設置され、天茶供養が行われたのである。さて、北本宿で行われる「大祭」はこれまでもさまざまな形で解脱会の組織や教えの基礎固めの場として機能してきた。昭和九年春五月の大祭は「解脱の教五法則」を刷り物として会員に頒布し、

教えの根本を示したことで特筆される。また、秋十月の大祭では初めて「萬部供養」が行われたことを記しておかなければならない。この供養が行われることになったのもそもは、会員の霊修業に萬部供養を修して欲しいという「御告」があったことによる。解脱会では、これを御五法の法力と陀羅尼經の功德によって人類をはじめとする一切の霊魂、有縁無縁萬霊を、その発生にまでさかのぼってすべて供養し、霊魂を浄化安霊せしめるはたらきがあるとす。

大祭当日、宝篋印塔の右側に準備された供養塔を囲むように「修身安楽」



撮影・高岡輝幸氏



句・菅谷秀文



絵・橋本豊治

生まれすぐ釈尊七歩あゆみしと

釈尊は生まれるや否や七歩あゆみ、右手で天を、左手で地を指差し、「天上天下唯我独尊」と宣言したという。これは「天にも地にも自分一人が尊い存在であり、必ず人々を救う」という意味である。

インドの神話と結び付けて、偉大な救済者が誕生した感動が語られている。